キーツの生態学的観点
「小さな丘の上でつま先立ちて」考

穴吹　章子[1)]

要　旨

キーツ(John Keats)は、1716年7月に薬剤師・外科医として働ける資格試験に合格した頃に「私は小さな丘の上でつま先立った」と始まる詩を書き始めた。そして、詩を完成させる時期に詩人として生きていく覚悟を決めている。この詩は従来それほど評価されてこなかったが、詳細に検討すると、詩行は単に美しい光景のカタログのような羅列的描写ではなく、季節の微妙な推移と、生きとし生けるものの相互関係を描いていることが分析できた。また、その描写は、英詩の伝統的な部分を踏襲していることを指摘するとともに、そこには、詩人としての自信を見て取ることができると論じた。さらに、そのような相互関係があるために、古代ギリシア人は自然の中に神々を見たり創造したりしてきたと、キーツは考え、ギリシア神話をその観点からとらえている点を指摘した。さらに、その相互関係があるからこそ、自然の治癒力を人は享受しうる可能性があるという考え方が示されている点を指摘した。この視点はキーツの詩人としての姿勢に関わるものであると結論づけた。

キーワード：キーツ、ロマン主義、エコロジー、ギリシア神話、自然

キーツ(John Keats)の最初の1817年『詩集』は無題の詩 'I stood tip-toe on a little hill'（「私は小さな丘の上でつま先だった」）で始まる。この詩は少し前に完成され、この詩集の最後に置かれた 'Sleep and Poetry'（「眠りと詩」）とともにほぼ同時期の1816年12月に書き上げられている。

当時、キーツは同年3月より外科助手として働き始め、7月に受験した薬剤師・外科医の資格試験にも合格し、10月31日で21才になれば薬剤師か外科医として働くことができる資格を得ていた。しかし、詩人としての才能に強い自信を持っていた彼は詩を精力的に書き始めていた。ジョン・テイラー(John Taylor)の回想録によれば、12月頃キーツが後見人のアベイ(Richard Abbey)と話し合った際に、「私は詩人としての私の能力を頼りにして生きていこうと思っています……私は心を固めたのです……私は自分がたいていの人よりも大きな能力を持っているとわかっています。だから私はその能力を使って生計を立てていこうと決心したのです」と述べている。[1]しかし、キーツは詩集を完成すべく創作をすすめながら、詩集刊行（3月3日）後の翌年5月頃まで外科助手の仕事をパートで続けていたが、それ以降外科医・薬剤師として生計を立てることはなく詩作に専念していくことになる。

ところでこの詩について、キーツが10月に訪問したリー・ハント(Leigh Hunt)は、その著書*Lord Byron and some of his Contemporaries*（『バイロン卿とその同時代人』1828年）で、この詩における描写とハントが住むハムステッドヒースの景観との関連を示唆している。[2]この詩が書かれた時期を考えると、確かにハントの居住地との結びつきは強

1）兵庫県立大学看護学部　専門関連科目外国語系

いと言える。だが、ベイト(Walter Jackson Bate)などによれば、詩にはハムステッドヒースだけに限らずキーツが幼少期長い時間を過ごしたエンフィールドの光景や、友人クラーク(Cowden Clarke)との散歩や、エドモントンの光景などの記憶などが反映しているという。[3]しかしベイトは、この詩の描写は田舎の光景についての息つく間もない一種のカタログであり描写が連続しているだけであり、しかも多くが記憶から書かれたものであると、この詩について高い評価をしていない。

しかしこの詩を詳細に検討すると、単なる「カタログ」や「描写の連続」ではなく、キーツの自然に対する深い思いと詩の伝統につながろうとする強い意欲が表現されていて、最初の詩集の巻頭に置くべき重要な詩であったことがわかる。本稿ではこの詩の重要性を明らかにしたい。

1 詩の構成

この詩は「小さな丘の上でつま先だって」見た景観や風物やそれに触発された思いを描いている。このような伸び上がる姿勢をとるとき、一般に、人は怒っていることができず、世界に対して受容的態度をとるようになると言われている。[4]さまざまな花（“the sweet buds”, l. 3）や木々（“a fresh woodland alley”, l. 20）や小川（“the jaunty streams”, l. 22）などに対して、詩人は心を開いて詩作へとかき立てられたといえよう。キーツゆかりの場所を重視すれば、詩が描く場所をハムステッドヒースやエンフィールドやエドモントンなどの特定の場所に結びつけたくなるが、詩が描いているようなさわやかな風がそよぎ光があふれ五月のさまざまな花などが楽しめる場所であれば、特定のキーツゆかりの場所に結びつける必要はないであろう。

例えば、この詩の冒頭で引用されたハントの *The Story of Rimini*（『リミニ物語』1816年2月）における“Places of nestling green, for poets made”（「詩人たちのために作られた、なかば埋もれるような緑の場所」III. 430)[5]は、フランチェスカがパオロを避けて散策する場所の描写からのものである。イタリアに設定されているその場所にも、花が咲き木陰があり小川が流れさわやかな風が吹いている。描写の上では、キーツが描く場所と地勢的にはあまり変わらず、咲いている花が少しだけ異なるだけである。大きな違いといえば、キーツの場合語り手が丘の上からの眺望を楽しむのに対して、フランチェスカは散策している点であるが、描かれる景観は類似している。

ここで詩の構成についてみると、大きく二つの部分、すなわち夏の健やかな自然、自然の豊穣さを満喫する詩人（1－115行）と、自然の事物にかき立てられ高揚する想像力への賞賛（116－242行）とに分けられる。夏頃に書き始められたのが前半で、12月頃に書き足されたのが後半である。M・アロット(Miriam Allott)は、特に前半の自然の繊細な観察による描写を高く評価している。[6]また後半部は、ワーズワースの『逍遥』第4巻の影響を受けて書かれたとされている。

さらに、ぞれぞれは二つの部分に分けることができる。前半は、詩人が立っている場所の説明(ll. 1-28)と“a posey Of luxuries bright, milky, soft and rosy”(ll. 27-28)を歌ったもの(ll. 29-60)と、“Nature's gentle doings”(l. 63)を歌ったもの(ll. 61-115)とである。後半は、月への呼びかけと、“the fair paradise of Nature's light”(l. 126)詩人の霊感の源としての賞賛と、最初に神話を歌った昔の詩人の霊感の源について“What first inspired a bard of old to sing Narcissus pining o'er the untainted spring?”(ll. 163-164)とである。

このように分けると、詩の構成の巧みさを読み取ることが容易になるので、順を追って検討したい。そして、その構成が詩人がいわば自らの詩人性を発見していく過程と重なっていることも明らかにしたい。

2 季節の推移の知覚

詩人が自分の喜びに喚起されてその経験を描写するとき、軽やかさとみずみずしさ、若々しい詩

人の個人的な体験の感覚や自己意識があふれている。

I stood tip-toe upon a little hill,
The air was cooling, and so very still,
That the sweet buds which with a modest pride
Pull droopingly, in slanting curve aside,
Their scanty leaved, and finely tapering stems,
Had not yet lost those starry diadems
Caught from the early sobbing of the morn.
The clouds were pure and white as flocks new shorn,
And fresh from the clear brook; sweetly they slept
On the blue fields of heaven, and then there crept
A little noiseless noise among the leaves,
Born of the very sigh that silence heaves:
For not the faintest motion could be seen
Of all the shades that slanted o'er the green. (ll. 1-14)
私は小さな丘の上につま先立った。
風は涼しくなりとても静かなので、
甘美な蕾が慎ましい誇りを持って、
うなだれてはすに傾いて曲がりながら、
葉がわずかで、微細に先細る茎を引き、
早い朝の涙で得た
あの星形の冠を失っていなかった。
雲は純白で、あたかも毛を刈ったばかりの羊が
澄んだ小川から上がって清々しいのようだった。
やさしく雲は天の青い野原で眠っていた。
そして、かすかな小さな音が葉の中に広がった、
沈黙がつく溜息から生まれたものだった。
緑の野に投げかける影の
かすかな動きすら見えなかったから。

ここで強調されているイメジは、特に2行目、8－9行目、12行目、13行目からは、熱気も激しさもなく、ひんやりとして、静かでみずみずしくさわやかで、それが終わることのないような喜びに満ちた健やかな世界のものであることがわかる。それは、そのような健やかで甘美な世界に浸ることで、詩の世界が開かれることを示すものであろう。このように、外界に呼応することから詩的な世界が展開するのは、キーツだけでなくロマン派詩人の詩に共通する側面である。

そして、ある場所に留まっていると自然界の甘美な光景が見えてきたと言う。

I gazed awhile, and felt as light, and free
As though the fanning wings of Mercury
Had played upon my heels: I was light-hearted,
And many pleasures to my vision started;
So I straightway began to pluck a posey
Of luxuries bright, milky, soft and rosy. (ll. 23-38)
私はしばらく見つめた、軽やかで自由に感じた、
メルクリウスのそよそよと吹きつける翼が
私の踵で戯れたかのように。私は心が軽くなり、
多くの喜びが私の視界に浮かびはじめ、
そこで、すぐに明るく乳白色の柔らかくばら色の
贅沢の花束を摘み始めた。

ここには、一つの場所、花や鳥や木などにとどまっていると、それが自分の詩的な世界に変容する、という詩人の考え方が表れている。"straightway", "pluck", "bright" は感覚の研ぎ澄ましを、"luxuries bright, milky, soft and rosy! " は枕にもたれるもの憂さを暗示すると、ウォルシュ (William Walsh) は考えている。[7]この二つの感覚の混在については、詩人の実体験であったにせよ、刺激を受ける感覚が研ぎすまされていく感じと、それと表裏一体をなして刺激を与えるものの物憂いような、けだるさが増していくというキーツ特有の感じ方も織り込まれている。特に "luxuries" には、あまりに多くを味わい過ぎたという「後悔」の響きを聞き取れるかもしれない。

ところで、上のように歌った後に取り上げられる花や木は数多い。一つ一つ植物の名前を確かめて読み進めると、初夏の森林植物園のようなところを散策している気にさせられるほどである。キングサリ ("a lush laburnum", l. 31)、スミレ ("the violets", l. 32)、ムラサキハシバミと野バラ

("A filbert hedge with wildbriar overtwined", l. 34)、スイカズラ ("clumps of woodbine", l. 36)、ブルーベル ("The spreading blue bells", l. 43)、マリゴールド ("ardent marigolds", l. 48)、スウィートピー ("sweet peas", l. 57)、サロー柳 ("the o'erhanging sallows", l. 67)、タンポポ ("the dandelion's down", l. 96)、ヒメスイバ ("the sorrel", l. 98)、待宵草 ("A tuft of evening primroses", l. 107)、ミヤママツ ("the waving of the mountain pine", l. 128)、サンザシ ("a hawthorn glade", l. 130)、バラ ("Fair dewy roses", l. 133)、月桂樹の花 ("flowering laurels", l. 134)、ジャスミンと野バラとブドウの花 ("the jasmine and sweet briar, And bloomy grapes", ll. 135-136) などである。

確かにベイトも指摘するように、次から次へと植物の描写がカタログのように続く。しかし、小さな丘の上から眺めている時に思い描かれた光景の中のキングサリから待宵草までの描写は、それぞれの花が咲き出す時期についての知識に裏付けられていることは看過できない。春から初夏へと季節が移りその時間の推移の中で咲き出す花の順番が示されているのである。また、M・アロットやゴエルニヒト (Donald C. Goellnicht) が賞賛するその描写は、生態学的にも正確なものだと見なしうる。例えば、ゴエルニヒトはマリゴールドの "your round of starry folds" (「星形のひだをもつ丸い花を」l. 47) という描写を賞賛している。この花はくっきりとした星形に広がり全体的には円形をしているから、正確な描写であるという。[8]キーツの優れた観察力による描写になっているというわけである。すなわち、この詩における多くの植物の描写は、キーツの綿密な観察力と洞察力による自然の世界の発見を表しているのである。

3 生態学的自然界

キーツの描写は、季節がゆっくりと推移する自然界、植物界の再現だけではなく、英文学における植物の捉え方も視野に入れた描写につながるものであった。ゴエルニヒトが称えたマリゴールドの描写はこう続いていた。

Open afresh your round of starry folds,
Ye ardent marigolds!
Dry up the moisture form your golden lids,
For great Apollo bids
That in these days your praises should be sung
On many harps, which he has lately strung;
And when again your dewiness he kisses:
Tell him, I have you in my world of blisses:
So haply when I rove in some far vale,
His mighty voice may come upon the gale. (ll. 46-57)
星形の襞を持つおまえの丸い花を新たに咲かせ、
燃えるようなマリゴールドよ。
金色のまぶたから朝露を乾かせ。
大いなるアポロが命じているからだ。
今、おまえの讃歌を多くのハープに合わせて、
歌うべきだと、その弦を神はかき鳴らせたばかりだ。
そして、再びおまえの露に神が口づけするとき、
伝えてくれ、私は至福の世界でおまえを抱いていると。
たまたま私がどこか遠くの谷間をさまようとき、
神の強力な声が疾風に乗って訪れるように。

マリゴールドは朝露を振り払い日の出とともに花を咲かせるという。このような観察は、英文学でも歌われてきたマリゴールドの描写を踏襲している。例えば、シェイクスピアは、お祭りのホステス役のパーディターにこの花の太陽を追って咲く性質を強調して言わせていた。

The marigold, that goes to bed wi' the sun
And with him rises weeping: these are flowers
Of middle summer, and I think they are given
To men of middle age.
The Winter's Tale (『冬物語』IV. iv. 105-8)
太陽と共に床につき、
太陽と共に泣きながら起きてくるマリゴールド、
これはみんな真夏の花ですので、中年の方々に

差し上げようと思います。

キーツが自然界と直接意識的に触れることが、実際には外科医・薬剤師養成教育における生物学の授業で実践されたにせよ、その観察は過去の文学者が歌ってきたことにも通じるものであった。だからこそ、マリゴールドを歌うことによって、詩神アポロから「強力な声」なる霊感が与えられることが期待できるのである。ここには、花を歌うことは詩人の勤めの一つであるという信念が見てとれよう。この詩で取り上げられるそれ以外の花も、過去の詩人たちも歌ってきたものであった。[9]このような綿密な観察は、ただ、自然科学だけに資するものではなく、英文学の伝統にもつながりうる可能性があるというキーツの観点が見て取れることを指摘しておきたい。すなわちキーツは自然界と詩の世界の相互依存を再発見したと言えよう。春の植物界の描写には、詩の伝統の中で詩作する自己を発見したという自意識と自信が窺えるのである。

また、ゴエルニヒトは、花の形状だけではなく植生についても彼の細かい観察が行き届いているという点も指摘している。

And let a lush laburnum oversweep them,
And let long grass grow round the roots to keep them
Moist, cool and green; and shade the violets,
That they may bind the moss in leafy nets.

A filbert hedge with wildbriar overtwined,
And clumps of woodbine taking the soft wind
Upon their summer thrones; there too should be
The frequent chequer of a youngling tree,
That with a score of light green breth[r]en shoots
From the quaint mossiness of aged roots: (ll. 31-40)

みずみずしいキングサリがその（五月の花の）上でさっと動き、
長い草が根の回りに生えて、その花を
湿らせ涼しく青々とするようにせよ、スミレに蔭を作り、
スミレが茂った葉の網で苔をくるむようにせよ。

野バラが絡み合ったハシバミの生け垣と
スイカズラの木立が、夏の玉座で
柔らかい風を受けて。そこにも
若い木の格子縞がしばしば生じるはずだ。
それは、薄緑のたくさんの兄弟とともに
古い根の風変わりで苔むしたところから芽を出している。

生態学的に、[10]スミレが生長するためにはその根が少し湿り気のある涼しい状態にあることや、若芽が古い根からどのように生えているかにも、キーツは関心を向けて、その植生を描いている。生育のためには適度な湿度と温度を必要とする植物のありようと、また、古い根から新芽が出るという、いわば死から生が生まれるような、自然界の循環的生のありようについての観点も取り入れて、新旧の交代の感覚を表現している。花は単独では咲くことはできず、自然界では相互依存の中で咲く。スミレが咲き誇るそのそばで古い根から新しい芽が出るという生命の営みへの目配りを忘れていないのである。

このように、さわやかで健全な世界に触発されて生まれたという詩には、健やかで伸びゆく命への讃歌があるだけではなく、それが衰え死にゆき後にする世界を育むための滋養になりうるという知識に基づいた現実的な洞察も備わっていたことがわかる。

そして、上の詩行に死のイメージが続く。それは、自然の循環的生の中にある死ではなく生の途中で挫折する死である。

Round which is heard a spring-head of clear waters
Babbling so wildly of its lovely daughters
The spreading blue bells: it may haply mourn
That such fair clusters should be rudely torn

From their fresh beds, and scattered thoughtlessly
By infant hands, left on the path to die. (ll. 41-46)
古い根の周りで澄んだ水の泉が、
そのかわいい娘たちである群れ咲くブルーベルのことではげしく
ゴボゴボと音をたてるのが聞こえる。ことによると哀悼しているのだろう。
そのように美しい房が乱暴に美しい花床から
引きちぎられ、子供の手で
思いやりもなくばらまかれ道に残され死んでいくのを。

ここで歌われているブルーベルは野生のヒヤシンスを指している。引きちぎられた花の様子は、ギリシア・ローマ神話の、アポロの円盤に当たって死んだヒアキュントスを彷彿させるので、一層血の色を彷彿とさせる。自然の営みには循環的な死だけではなく、その生の中途で引きちぎられ中断される死もあることへの詩人の意識が見てとれよう。必然・偶然の両方の死を含みながら、自然界の生は成り立っていることへの目配りを忘れていないのである。ちなみに、この花の死をもたらすのは、“scattered thoughtlessly”と、何の思慮もない（“thoughtlessly”）子供の手の仕業である。

4 季節との共振

ところで、「つま先立つ」（“tip-toe”）というテーマは、詩人の「私」から、詩人が喜びを持って観察している対象のスウィートピーへと移され、詩人と自然の事物が重ね合わされて、新たな段階へ移行する。

Here are sweet peas, on tip-toe for a flight:
With wings of gentle flush o'er delicate white,
And taper fingers catching at all things,
To bind them all about with tiny rings. (ll. 59-60)
ここにスウィートピーが飛び立とうとつま先立って、
繊細な白色にやさしい紅さす翼に乗って、
先細りする指先ですべてをつかみ、
小さな巻き輪でそれらを縛りながら。

詩人は、花のありようと自らをここで重ねあわせる。詩の流れから見ると詩人の動きに自然が呼応したように読めるが、実際には詩人が静かにゆっくりと営まれる自然のダイナミズムに感応していた自らを発見したと言えるだろう。また、自然の外観の観察からその内側へと移行しているといえよう。全体が、蝶のように舞い上がろうとするスウィートピーの様子に重ねられて描かれている。花の方が詩人に近づいてきている描き方である。このとき、見る対象と見ている自分をイメージにおいて重ねることによって、自然観察が自己観察の様相を帯びてくるのである。季節の推移の中で詩人も含めた生きとし生けるものが生の横溢を求めて伸び上がろうとする。自然と同調していることを発見することによって、詩人にとって自然の営みが重要であると知覚していると言えよう。

ちなみに、ギティングズ(Robert Gittings)はこの詩行について語法の点でワーズワース(William Wordsworth)の次のソネットの反映を指摘している。[11]

How sweet it is, when mother Fancy rocks
The wayward brain, to saunter through a wood!
An old place, full of many a lovely wood!
Tall trees, green arbours, and ground-flowers in flocks;
And wild rose *tip-toe upon* hawthorn stocks,
(ll. 1-4. italics mine)
なんと甘美なことか、母なる空想がとりとめない頭を揺らすとき、森を散歩することは。
懐かしい場所は、多くのかわいい木、
高い木々、緑のあずまや、たくさんの大地の花に満ちている。
そして野バラがつま先立ってサンザシの幹に伸びあがる。

サンザシの幹に伸び上がろうとする野バラの描

写の影響を受けているとしても、キーツが同じ“tip-toe”を用いながら、その花の様を飛び立とうとするイメージへと少し変えていた点に注目したい。詩人と花と蝶が“tip-toe”という同質の行為によって、一つの大きな自然の中で調和しうる可能性も表していると考えられるだろう。

5 自然の生態学的理解へ

次に詩人は自然の営み“Nature's gentle doings”(l. 63)に目を向ける。それは小川の畔から見た光景であるが、そこには視覚イメージだけでなく聴覚的イメージも加えられている。まず、「モリバトのクークー鳴く声より穏やかで」(“softer than ring-dove's cooings”, l. 64)、「なんと静かな」(l. 65)と、小川のせせらぎの気持ちを落ち着ける側面が強調される。次に、「小さくはないささやき」(l. 66)、「自然の説教」(l. 71)と、小川の営みの広がりを示している。そして、その観察が「交互に親切を交すこと」(“an interchange of favours”, l. 85)への気付きにつながっていく。小川に張り出しているサロー柳に小さくはないささやきを送るところを草の葉がゆっくりとよぎる。また、自然の説教をしている小石の多い川床では小魚の群が涼しさで調節された太陽の光の豊かな快楽を味わう。さざ波がクレソンの生えるところに打ち寄せると、そこで川は自らを冷やし、また同時にさわやかさと湿り気をクレソンに与える。また、ゴシキヒワは低い垂れた枝から川辺に降りて、じっとしたり水をすすったりさえずったり羽を滑らかにしたりして、飛び立つと歌う。

How silent comes the water round that bend;
Not the minutest whisper does it send
To the o'erhanging sallows: blades of grass
Slowly across the chequered shadows pass -
Why, you might read two sonnets, ere they reach
To where the hurrying freshness aye preach
A natural sermon o'er their pebbly beds;
Where swarms of minnows show their little heads,
Staying their wavy bodies' gainst the streams,
To taste the luxury of sunny beams
Tempered with coolness. How they ever wrestle
With their own sweet delight, and ever nestle
Their silver bellies on the pebbly sand. (ll. 65-77)
なんと静かに川はその湾曲部を流れることか、
小さくはないささやきを
張り出しているサロー柳に送る。草の葉が
ゆっくりと格子状の蔭を横切り通り過ぎる、
あなたがソネットを二篇読む前に、草の葉は
急ぎ流れるみずみずしさが永久に自然の説教を
小石の多い川床にまで伸びるかもしれない、
そこでは小魚の群が小さな頭を見せて、
波打つ身を流れに逆らってとどめ、
冷たさに調節された太陽の光の
豊かな快楽を味わっている。どのように小魚は
いつも甘美な喜びとあらがい、銀色の腹を
小石湿じりの砂にいつも横たえていることか。

悠久に静かに流れる川の畔で、光を受けた草は成長しながら川を浄化し、その浄化されたきれいな水の川で小魚が泳ぎ産卵する。生きとし生けるものは一つとして単独に生きてはいないことへの眼差しがより強く意識されている。

ところで、自然の営みの相互作用の豊かさに気付いた詩人は、自分の思いから抜け出るために空想で乙女との出会いを求めている。

Were I in such a place, I sure should pray
That nought less sweet, might call my thoughts away,
Than the soft rustle of a maiden's gown
Fanning away the dandelion's down;
Than the light music of her nimble toes
Patting against the sorrel as she goes. (ll. 93-98)
私がそんな場所にいたらきっと祈るだろう、
私の思いを散らしてくれるようにと、
タンポポの綿毛をあおぎ飛ばす
乙女のガウンの柔らかい衣擦れの音と同じくらい甘美なものが。

彼女が進むとき、スイバを足音軽く踏んでいく
敏捷なつま先の軽やかな音楽と同じくらい甘美なものが。

ここで求められている乙女は、タンポポの綿毛を散らしスイバ（酸葉）を踏みしだきながら進んでいく。目の前にいない存在を祈るように求めることは、自己の孤独の思いが一層強く意識されていることの表れだといえるだろう。思いはタンポポの綿毛のように散らされるものであり、スイバのように踏まれて絶えてしまうものかもしれない。ここにも生の二つの側面が反映している。タンポポの綿毛は、生と死の循環の中で、生を成就し次の命に繋がる死を表す。それに対して踏みしだかれるスイバは、その循環から引きちぎられそのまま消えてしまう死を表すだろう。

ブルーベルを引きちぎった子供が無思慮（“thoughtlessly”）だったのに対して、この乙女は無垢な思い（“innocent thought”）に戯れている。

How she would start, and blush, thus to be caught
Playing in all her innocence of thought. (ll. 99-100)
どんなに彼女は驚き顔を赤らめるだろうか、そのように
無垢な思いで戯れている時につかまえられて。

その空想の乙女は詩人の思考を散らし、詩人を置き去りにする。

And as she leaves me may she often turn
Her fair eyes looking through her locks auburne.
(ll. 105-106)
そして、彼女が私をあとに残すときにしばしば振り返って
その美しい目でとび色の巻き毛ごしに見てくれますように。

無垢な乙女を思うことによって、詩人は自分の思考の拡散を期待する。空想上の無垢な乙女によってタンポポの綿毛のようにかき散らされ新しい命を得るとしても、あるいはスイバのように踏みしだかれ絶えてしまうとしても、自分の思いが果ててしまうことを求めている。自然の中の生命と同じように自分の思いが永続しないことを願っている。思いの永続性ではなく、思いも自然界の生けるものと同じく途絶することが求められている。逆に言えば、自然の生態学的営みへの気づきから生まれた思いであるとも解せよう。これは、「眠りと詩」（‘Sleep and Poetry’, ll. 122-123)で表明される、無垢な思いに満ちた甘美な自然の「フローラと老パーン神の世界」（“Flora, and old Pan”, l. 102)に別れを告げねばならないという決意を表していると考える研究者もいる。

ちなみにこのスイバについては、この詩の後に書くことになる*Endymion*（『エンディミオン』）でも、子鹿という無垢な動物がスイバを引き裂くイメージとして使われることになる。“sorrel untorn by the dew-claw'd stag”「子鹿の露にぬれるかぎ爪で裂かれていないスイバを」IV. 685)

ところで、空想の乙女によって思考から解き放たれることを期待した詩人のまどろみは夜になって破られた。まどろみから眠りへと誘われるのではなく、夕暮れに待宵草の花が咲くときのポンという音か、サナギから飛び立つ蛾か、出てきた月が詩人を目覚めさせたとなっている。そのような微かな音や、わずかな夜空の変化に対しても反応できるという五感を研ぎ澄ましている詩人像が立ち現れる。

What next? A tuft of evening primroses,
O'er which the mind may hover till it dozes;
O'er which it well might take a pleasant sleep,
But that 'tis ever startled by the leap
Of buds into ripe flowers; or by the flitting
Of diverse moths, that aye their rest are quitting;
Or by the moon lifting her silver rim
Above a cloud, and with a gradual swim

Coming into the blue with all her light. (ll. 107-115)
次に何が？一房の待宵草。
花の上で心がまどろむまで飛び交うのもよい、
この花の上で楽しい眠りをとるのもよい、
ただしつぼみが成熟した花へと跳躍することに
驚くことがなければ。また永久に安らぎのさなぎを去る
様々な蛾が飛びかうことに、
またその銀色の冠を雲の上に上げて
徐々に泳いで、光とともに
青い空に入ってくることに。

一瞬のまどろみは、夕べになって咲く待宵草や飛び交う蛾や月の出によってそのまどろみが破られ、詩人は覚醒へ導かれる。空想の乙女の出現ではなく、実際の自然についてのより詳細な観察や、自分の鋭敏な感覚がとらえるものを誠実に謙虚に受容したことが詩人を思いから解き放ったといえよう。

アロットが賞賛した感覚的な自然描写が散りばめられた詩の前半では、咲き乱れる甘美な花が描写されるが、そこには死への気づきも示されていた。また、自然の営みに注意を向けているうちに、乙女との出会いを強く求める気持ちが湧いてきたことを見た。そこには、再生への契機にもなるかもしれないが、生の横溢のさなかでその生を断絶させる力を求める側面があり、また詩人の思いが、自然界の生命と同じく永続しないことへの望みでもあった。いずれの結果になろうとも、それは「フローラと老パーン神の世界」からの脱却を目指そうとする意欲に満ちたものであったが、自然界の微細な変化にも反応でき、それを誠実に受け止めることによって一層の覚醒へと導かれたのであった。

6 神話的世界の再発見

詩の後半は全体としては、上で述べたように *The Excursion*（『逍遥』）第4巻の影響下で書かれたものである。自然現象から神話が生じているという見方をワーズワースに教わったのである。

まず、自然が与える直接の喜びから作品が生まれ、そのような作品を読むときその自然の息吹が感じられると詩人は歌う。

For what has made the sage or poet write
But the fair paradise of Nature's light?
In the calm grandeur of a sober line,
We see the waving of the mountain pine;
And when a tale is beautifully staid,
We feel the safety of a hawthorn glade:
When it is moving on luxurious wings,
The soul is lost in pleasant smotherings:
. . . . .
So that we feel uplifted from the world,
Walking upon the white clouds wreathed and curled.
(ll. 125-140)
なぜなら、いったい何が賢者や詩人に書かせるのだろうか、
自然の光あふれる美しい楽園以外に。
まじめな詩行の静かな荘重さの中に
ミヤママツが揺れ動くのが見える。
物語が美しく落ち着くと、
サンザシが咲く林間の空き地の安全を感じる。
それが喜びにあふれた翼に乗って動くとき、
魂は楽しい息苦しさに夢中になる。
. . . . .
そのため、私たちは世界から引き上げられて、
巻きつき渦巻く白い雲の上を歩いている気がする。

自然の美しさなどにかき立てられて書かれた詩には自然の荘重さや静けさや豊かさが反映しているという。詩が生まれるにはまず第一に自然の豊かさに鋭敏に反応することが重要である。また、自然を楽しむことと、自然を描いた文学を楽しむこととが繋がるという。ここには、自然の享受と文学という人工的世界の享受とが分裂しているのではなく調和しているというキーツの信念が読みとれる。

そして、“So felt he”（l. 141）、“So did he feel”

(l. 151) と切り出しながら、プシュケーとエロース、シュリンクスとパーンの神話を語った詩人たちを例に挙げ、『逍遥』における旅商人の考え方を借りて、どのようにして自然界の事物を享受することから神話が生まれたかを語る。始まりは、自然によってかき立てられた詩人の情念からである。そして、「一体何が最初に昔の詩人に霊感を与え、歌うようにしたのか、どこか甘美なそぞろ歩きで、枝がすべて絡み合った小さな場所を彼は見つけた」("What first inspired a bard of old to sing. . . ? In some delicious ramble, he had found A little space, with boughs all woven round;" ll. 16-164) とナルシスとエコーの神話を、さらに、「どこに彼はいたのか」("Where had he been, . . . ?" ll. 181-185) と、エンディミオンとポイベーの神話を取り上げ、「自然の光あふれる楽園」(l. 126)に呼応して生まれた場所の持つ雰囲気に目が向けられる。

ムアマン(Mary Moorman)の指摘によれば、第4巻857-864行を特にキーツが好んでいたという。[12]クート(Stephen Coote)もムアマンを踏襲して、同じような説明をしている。[13]キャンドル(John Kandle)は、自然の中に神々を見るという想像力の力強さに対するノスタルジアが、キーツに感銘を与えたのだろうと解している。[14]第4巻はキーツには特に重要であったとされている。[15]旅商人は孤独者に、いかに自然界の美しさが異教のギリシアの素朴な若者の主観性を養い彼らをアニミズム的神話へと導いたかを語る。「空想」が太陽にアポロを、月にシンシアを思い描いたという詩行にキーツが感動し、その感動がこの詩に反響している。

天空の神々が創り出されたことだけでなく、ほかの神話創造についても考えを深めている。キーツは、ギリシア時代には自然の中に神々を見ることができたという考え方を踏襲して、自然の荘厳さや静寂さや豊穣さに耽溺したため、この世から引き上げられ雲の上を歩いている感じを持つことができた人が、プシュケーとエロースの物語をはじめに語ったと考えている。これらの神話的存在は『逍遥』では触れられていないが、詩人の体験を投影することによって、その神話が生まれたと考えを深めたのである。プシュケーも同じく世界から引き上げられ風に乗って驚異の領域へ行き ("how Psyche went/On the smooth wind to realms of wonderment;" ll. 141-142)、天に吹き上げられユピテルの玉座の前で感謝のおじぎをする ("both to heaven upflown, To bow for gratitude before Jove's throne", ll. 149-150) という具合に、詩人の自然における甘美な体験がその神話に反映している。

ワーズワースにとっては、自然と人が交流しそこに神々を見るという牧歌的世界は過去のものであった。キーツにとっては、そのような心性がなおも生きていて、自然との交わりによって想像力をかき立てられ、神話的物語が語られ、それらが大いなる一つの世界のものとして体得できることが重要なのである。

ナルキッソスとエンディミオンがいかに自然の持つ雰囲気に想像力がかき立てられて生み出されたについて語られる。ナルキッソスの神話は、小さな場所にある澄んだ水辺に咲く花を詩人が見たことからつくられたという。

And on the bank a lonely flower he spied,
A meek and forlorn flower, with naught of pride,
Drooping its beauty o'er the watery clearness,
To woo its own sad image into nearness: (ll. 171-174)
その土手に咲く寂しい花を彼は見た、
柔和で孤独な花を、いささかのおごりもなく
その美しさを水面の清澄さの上にうつむけて、
自らの悲しい面影を、近くにと懇願している。

孤独に咲く花から叶わない願いの中に焦がれながら絡みとられている存在をつくり出しているのである。自然の事物から人間の持つもの狂わしいような深い情念の気づきへと導かれている。成就しないのに焦がれずにおれない、存在を根底から

揺さぶり破壊するような悲劇的情念を詩人は自然と同調することによって見いだしたといえよう。

また、エンディミオンの神話についてはこう説明する。

But though her face was clear as infant's eyes,
Though she stood smiling o'er the sacrifice,
The Poet wept at her so piteous fate,
Wept that such beauty should be desolate:
So in fine wrath some golden sounds he won,
And gave meek Cynthia her Endymion. (ll. 199-204)
しかし女神の顔は子供の目のように澄んでいて、
自分への犠牲に微笑みかけながら女神は立っていたけれども、
詩人は女神のそれほどの悲惨な運命に泣いた、
それほどの美しさが孤独でなければならないことを泣いた、
そして高雅な憤りを感じて最高の音を勝ちとり、
柔和なシンシアにエンディミオンを与えた。

詩人は、暗い夜空を明るく照らし人々に仰ぎ見られ崇拝される月の女神に深く大きな孤独を感じたからこそエンディミオンを創造しえたという。女神の孤独の状況を創造的に理解し、それがエンディミオンの創造を促したにとしている。自然が五感に与えるものを喜びとして感受するだけではなく、情念の深さについてそれを理解することも、重要なこととしてとらえられていることが分かる。女神は人間とは異なる存在だから、異なる情念を持つだろうという観点はキーツにはなく、神々も人間もともに深い情念を持ち、それに共感できることが重要なのである。

キーツは、月の女神とエンディミオンの結婚の夜を愛と幸福と健康の時期として描こうとするが、十分書き尽くせないと述べて詩の結末部へと導く。「しかしもはや、私のさまよう精神はこれ以上高く舞いあがれないに違いない」(“But now no more, My wand'ring spirit must no further soar.”ll. 241-242)と、一種の疲労感が混じったような絶望的なような気分で詩は終わるが、想像力の力が尽き全力を振り絞ったと、自画自賛するような気分も読みとることができよう。

以上、詩を4つの部分に分けそれぞれのパターンを指摘した。この詩は、甘美な自然に耽溺するような雰囲気を持つけれども、細部を検討すると、季節の推移や生命の生態学的な相互関係が描かれていることが明らかとなった。またそこには自然の中に死があるのと同じく、外的な力による死への思いや自らの中にある自分の存在を破壊するような身を焦がす情念や、それに対する不安もさし挟まれていた。心身をなだめ癒す甘美なものに対する愛着は大きいけれど、心身を脅かすものに対しても、目覚め続けようとする姿勢も見て取れた。それは、病や死を含みながら存立しうる愛と幸福と健康のある世界を求めて模索していたためではないかと考えられる。ガイ病院での夜の巡回の様子を彷彿する箇所は、月の女神とエンディミオンの結婚というクライマックスで使われていることからも、このことはいえるのではないだろうか。

The breezes were ethereal, and pure,
And crept through half closed lattices to cure
The languid sick; it cool'd their fever'd sleep,
And soothed them into slumbers full and deep.
(ll. 221-224)
そよ風は霊妙で清らかで、
少し開いた格子窓から忍び込み、
元気のない病人を治す。風は彼らの熱のある眠りを冷やし、
彼らをなだめて、完全で深い眠りへと運んだ。

上の詩行にも二つの気分の対比が読みとれよう。一つは消耗性の「熱のある病」(“languid sick”, “fever'd sleep”)で、一つは「みずみずしさ」「健康の涼しさ」「さわやかさ」(“ethereal”, “pure”, “soothed”)である。この二つがこの詩の独自性を形づくっていたのである。鋭敏な感受性で捉え

られた現実性だけでなく、全体性と健全さもある。これは現実の自然についてのキーツの理解を表しているのであろう。R・ローゼンタールは『季節性うつ病』で、キーツを季節の持つ重要性に敏感な詩人の一人として紹介しているが、[16]キーツはこの詩で生きとし生けるものが互いに支えあっている生態学的な自然の重要性に加え、そのような自然の営みに人間も同調する中に、健やかな世界に通じうる可能性も求めていると言えよう。自然との共振関係に人間も組み込まれ、自然からの働きかけを受容することで、人間の身体の内部でそれに呼応し息づき始めるものへの気づきが、示されていたと言えよう。そして自然の営みに同調することによって健やかな世界に誘われうるという考え方は、身体の不調だけからしか自己の自然性を意識できなくなっているかもしれない今日の私たちには、忘れ去られてはならないであろう。

註

[1] "He communicated his Plans to his Ward but his Surprise was not moderate, to hear in Reply, that he did not intend to be a Surgeon – Not intend to be Surgeon! why what do you mean to be? I mean to rely on my Abilities as a Poet – John, you are either Mad or a Fool, to talk in so absurd a Manner. My mind is made up, said the youngster very quietly. I know that I possess Abilities greater than most Men, and therefore I am determined to gain my Living by exercising them. – Seeing nothing could be done Abbey called him a Silly Boy, & prophesied a speedy Termination to his incondsiderate Enterprise." Walter Jackson Bate, *John Keats* (The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1978), p. 117 に引用。

[2] "[the poem was] suggested by a delightful summer-day, as [K.] stood beside the gate that leads from the Battery on Hamstead Heath into a field by Caen Wood." Miriam Allott, *Keats: The Complete Poems* (Longman, 1986), p. 85.に引用。

[3] As a result, "I stood tiptoe" simply relapses into one description after another, a sort of breathless catalogue of rural sights. Much comes from memory. The Enfield years return, the walks with Cowden Clarke, the stream near his grandmother's house in Edmonton (with the minnows "Staying their wavy bodies 'gainst the stream"). So do some of the stock images of the Felton Mathew period – maidens with "downward look," thoughts of "realms of wonderment." Bate, p. 123.

[4] 市川浩『精神としての身体』(講談社、1995)、135頁。

[5] *The Poetical Works of Leigh Hunt* ed. by H. S. Milford, M.A., (rpt. 1923; AMS Press, 1978), p. 22.

[6] Miriam Allott, p. 85.

[7] *Introduction to Keats* (Methuen, 1981), p. 16.

[8] "an exact description of the specific star shape of the marigold which also captures its overall circular form", *The Poet-Physician* (University of Pittsburgh Press, 1984) , p. 89.

[9] 加藤さだ『英文学植物考』(名古屋大学出版会、1985)

[10] *OED*によれば、ecology (生態)、ecological (生態学の) の初出はそれぞれ1873年、1893年であるが、キーツの描写は、生けるものとその環境との相互関係への目配りがあるので、この用語を用いた。

[11] Robert Gittings, *John Keats* (Heinemann, 1970), p. 71.

[12] Mary Moorman, *William Wordsworth, A Biography: Later Years 1803-1850* (Oxford Univ. Press, 1968), p. 314. "The fourth book of The Excursion above all, with its description of how in the ancient world the Greek imagination peopled the earth and heaven with deities, had a profound effect upon him and undoubtedly encouraged him to turn his own genius towards that world."

[13] Stephen Coote, *John Keats: A Life* (Hodder& Stoughton, 1995), p. 57. "The forth Book was of particular interest to Keats since it is an account of how the spirits of the Solitary, a man disillusioned by the moral and political failure of the French Revolution, are slowly reanimated by the Wanderer, who tells him how the beauties of the natural world, nourishing the subjectivity of 'the unenlightened swains of pagan Greece', encouraged them towards an animism which saw the whole world as alive

with intimations of the divine. 'Fancy' figured Apollo in the sun and Cynthia in the moon."

[14] John Kandle, "The politics of Keats's early poetry", *The Cambridge Companion to Keats*, ed. by Susan J. Wolfson (Cambridge Univ. Press, 2001), p. 9.

[15]キーツが特に感動したのは次の詩行であり、この詩の詩想と対比できる。

In that fair clime, the lonely herdsman, stretched
On the soft grass through half a summer's day,
With music lulled his indolent repose:
And, in some fit of weariness, if he,
When his own breath was silent, chanced to hear
A distant strain, far sweeter than the sounds
Which his poor skill could make, his fancy fetched,
Even from the blazing chariot of the sun,
A beardless youth, who touched a golden lute,
And filled the illumined groves with ravishment.
Up towards the crescent moon, with grateful heart
Called on the lovely wanderer who bestowed
That timely light, to share his joyous sport:
And hence, a beaming Goddess with her Nymphs,
Across the lawn and through the darksome grove,
Not unaccompanied with tuneful notes
By echo multiplied from rock or cave,
Swept in the storm of chase; as moon and stars
Glance rapidly along the clouded heaven,
When winds are blowing strong. (IV. 851-871)

[16] R・ローゼンタール『季節性うつ病』(講談社、1992) 10-11頁。

Keats's ecological idea of Nature in 'I stood tip-toe on a little hill'

Akiko ANABUKI[1)]

Abstract

John Keats wrote an untitled poem beginning with 'I stood tip-toe on a little hill' from the summer to the end of the year in 1716, while he became a Licentiate of the Society of Apothecaries but decided to end his medical training. The poem seems to reflect his decision and claim to be a poet, so that it is more important than has been traditionally thought.

Analyzing the lines closely, the followings are made clear. Although the poem seems a catalogue of beautiful sights to some critics, the description is not a catalogue at all, but shows the subtle transition of seasons and the ecological interrelationships in natural things. I also try to demonstrate that such natural descriptive ways follow the English tradition of poetry. Moreover, those interrelationships inspire poets to create divine beings in nature as pagan myths were created, and can bring some healing power of nature to the sick.

Key Words: Keats, romanticism, ecology, nature, mythology

Foreign Languages, General Education, College of Nursing Art and Science, University of Hyogo